

## 指導行政のポイント

### 生徒による“授業評価”

菱村 幸彦

さきごろ“都立高の先生/生徒が「採点」というニュースが報じられた(6月3日付け「朝日新聞」夕刊)。

#### 来年度から全都立高校に導入

年頭の本紙(57号)で、今年は教員評価がクローズアップされると指摘し、いま、人事考課制度の見直し、指導力不足教員の人事管理、10年経験者研修の評価という三つの観点から、教員評価のあり方が課題となっていることを述べた。これにもう一つ、生徒による授業評価を加えねばならない。

新聞報道によると、東京都教育庁は、来年度からすべての都立高で生徒が教師の授業を評価する制度を導入するという。都教委は、昨年度から生徒による授業評価の検討をはじめ、今年度は自由参加で実施校を募ったら、174校(都立高の8割)から応募があり、すでに授業評価の試行をしている。

評価方法は各学校に任せているので、生徒に授業の感想を自由に書かせる方法をとる学校もあるようだが、都教委では、評価項目の参考案として、たとえば、「先生の説明はわかりやすいか」「黒板の内容は整理されているか」「熱心に教えてくれたか」「授業の準備を充分にしているか」「生徒に公平に接しているか」などのチェックポイントを示すことを検討している。生徒は、こうした項目に沿って、教師の授業の内容や技術などについて、5～3段階で評価することになる。

授業評価に対する教師の反応はどうか。古来わが国では“三尺下がって師の影を踏まず”というように、師は尊いものという観念がある。最近の生徒にそうした観念があるかどうかは別として、少なくとも教師には「教える側が、教えられる側から評価される」という発想はない。

それが、突然、これからは生徒が教師を評価する

と言われたら、たいていの教師は反発するか、反発はしないまでも、戸惑いを隠せないだろう。

#### すでに大学では改革の目玉にも

しかし、授業評価については大学で先行している。いまだこの大学でも、大学改革の一環として、自己点検・評価が盛んに行われている。その目玉の一つとして、学生による授業評価を組み込む流れが定着しつつある。

当然、大学の教員のなかには学生による授業評価にアレルギーを示す者は少なくない。その代表的な意見としては、「真面目に勉強もしない学生に、教える人間の評価など不可能だ」「狭隘な施設などを放置したまま、評価だけを厳しくすることは問題だ」「評価によって、教える側の創造性や個性が抑圧される」「大道芸人のように面白がらせる授業が、真の大学の授業とは言えない」「教員の人事管理の資料として悪用されないか」などが挙げられている(渡辺勇一「学生による授業評価をどう見るか」)。

これらの意見には、小・中・高校の教員も共感するのではないかと。しかし、このように拒否的意見は強いものの、一方、授業評価を実施した大学の教員に「授業評価の結果は信頼できるか」と質問すると、6割の教員が「信頼できる」と肯定的に答えているという。つまり、大学の教員は、授業評価に対する拒否的心情をもちながらも、その積極面を評価して授業改革を考えようとしているわけだ。

昨年、小・中・高校の設置基準に自己点検・評価の規定が加えられた。自己点検・評価の一環として、生徒による授業評価を行い、それを授業改善に生かすことは、大学以上に小・中学校において必要である。小学校は無理としても、中・高校では、生徒による授業評価が新しい課題になるだろう。

(ひしむら・ゆきひこ = 公立学校共済組合理事長)

●新刊案内● 最新刊【付・学術資料CD-ROM】A5判 290頁・定価 2730円 教育開発研究所刊  
不登校の原因は？ 不登校中何を考えどう行動したか、学校・教師に何をしてほしいか？ どう乗り越えたか？

『不登校—その後』【編著】森田 洋司(大阪市立大学大学院教授)